令和3年度

最新出土考古資料展

抽象文土器（展開写真）
（成田市水神作遺跡出土）

縄文土器（佐倉市向山谷津遺跡出土）

ナイフ形石器（印西市東海道遺跡出土）

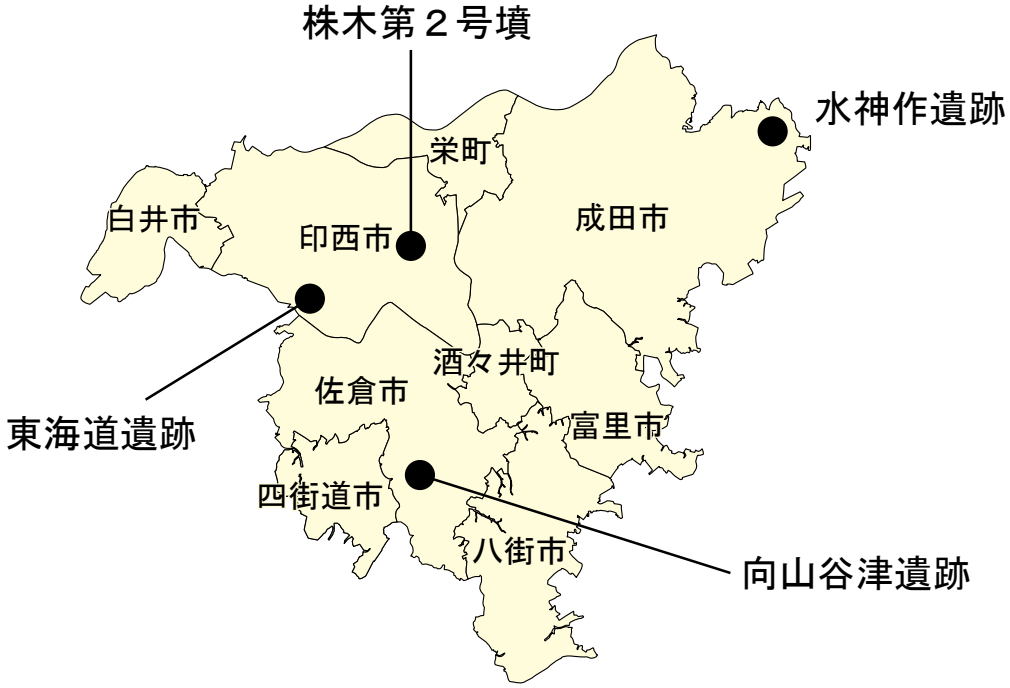
墨書土器（佐倉市向山谷津遺跡出土）

ごあいさつ

このたびの展示は、前年度に続き24回目となる「最新出土考古資料展」を開催いたします。今回はそれぞれ時代の異なる４つの遺跡から、個性豊かな出土品を集めました。まず、印西市東海道遺跡からは、旧石器時代の超大型のナイフ形石器を取り上げました。成田市水神作遺跡から出土した縄文土器には、人ともカエルともつかない抽象文が施されています。古墳時代中期に築造された印西市株木第２号墳は、その主体部から鉄剣や玉類などの副葬品が出土しました。そして、佐倉市向山谷津遺跡では、奈良・平安時代の竪穴住居跡から漆入りの須恵器坏や墨書土器が発見されました。

本展示が多くの方々にとって、印旛地域の歴史に関心を深めていただくと同時に、文化財保護への御理解に寄与できますことを、心から願っております。

最後に、展示遺物と写真資料の借用に御協力を賜りました成田市教育委員会生涯学習課、佐倉市教育委員会文化課、印西市教育委員会生涯学習課、御後援いただきました印旛地区文化財行政担当者連絡協議会、ならびに関係諸氏に心より御礼申し上げます。



展示遺跡の位置

歴史年表

※太字は展示遺跡

年代	時代		展示遺跡と印旛郡内の主な遺跡	全国の主な遺跡	主なできごと
3万8千年前	旧石器時代（後期）				大陸から現生人類が日本列島に渡り、居住を始める
3万4千年前			墨古沢遺跡（酒々井町） 瀧水寺裏遺跡（印西市） **東海道遺跡（印西市）**	岩宿遺跡（群馬県）	
3万年前			出口・鐘塚遺跡（四街道市）		石刃技法が広がる 姶良・丹沢火山灰が降灰する
2万年前			東内野遺跡（富里市）		ナイフ形石器が発達する 槍先形尖頭器が発達する 細石器が使われる
1万5千年前	縄文時代	草創期	南大溜袋遺跡（富里市）	大平山元Ⅰ遺跡（青森県）	土器が作られ始める・弓矢が発明される 氷河期が終わり気候が温暖化する
1万2千年前				鳥浜貝塚（福井県）	竪穴住居が作られる
7千年前		早期	間野台貝塚（佐倉市） 上座貝塚（佐倉市）		貝塚が形成される 炉穴が作られる
5千年前		前期	木戸先遺跡（四街道市） 和良比遺跡（四街道市）	三内丸山遺跡（青森県）	気候が温暖化し、海水面が上昇する 環状集落が形成される
4千年前		中期	生谷松山遺跡（佐倉市） **水神作遺跡（成田市）** 長田雉子ヶ原遺跡（成田市）	加曽利貝塚（千葉県）	大型の貝塚が形成される
3千年前		後期	宮内井戸作遺跡（佐倉市） 井野長割遺跡（佐倉市）	亀ヶ岡遺跡（青森県）	土偶・石棒などが多く作られる
2千年前		晩期	吉見台遺跡（佐倉市） 荒海貝塚（成田市）		
B.C.300	弥生時代	前期		土井ヶ浜遺跡（山口県） 菜畑遺跡（佐賀県）	北九州に稲作が伝わる
紀元前		中期	天神前遺跡（佐倉市） 大崎台遺跡（佐倉市）	唐古・鍵遺跡（奈良県）	再葬墓が作られるようになる 環濠集落の形成される
紀元後					方形周溝墓が作られるようになる
A.D.300		後期	江原台遺跡（佐倉市） 飯郷作遺跡（佐倉市）	登呂遺跡（静岡県） 池上曽根遺跡（大阪府）	倭国の内乱が続く 239　卑弥呼が魏に使いを送る
400	古墳時代	前期	復山谷遺跡（白井市） 向新田遺跡（印西市）		古墳の築造が始まる
500		中期	**株木第２号墳（印西市）** 吉高浅間古墳（印西市）	大仙陵古墳（大阪府） 江田船山古墳（熊本県）	巨大前方後円墳の築造 千葉県内で須恵器が使われる
600		後期	道作古墳群（印西市） 宮前古墳（八街市）		埴輪が盛んに作られ、古墳に並べられる
	飛鳥時代		竜角寺古墳群（栄町） 下方内野南遺跡（成田市）	岩屋古墳（千葉県）	645　大化の改新
700	奈良時代		**向山谷津遺跡（佐倉市）** 高岡遺跡群（佐倉市）	下総国分寺（千葉県）	710　平城京に都を移す 794　平安京に都を移す
800	平安時代		大袋腰巻遺跡（成田市） 川栗館跡（成田市）		
900			野毛平遺跡群（成田市） 池ノ下遺跡（印西市）		935　平将門の乱

東海道遺跡 ―超大型のナイフを携えた狩人―

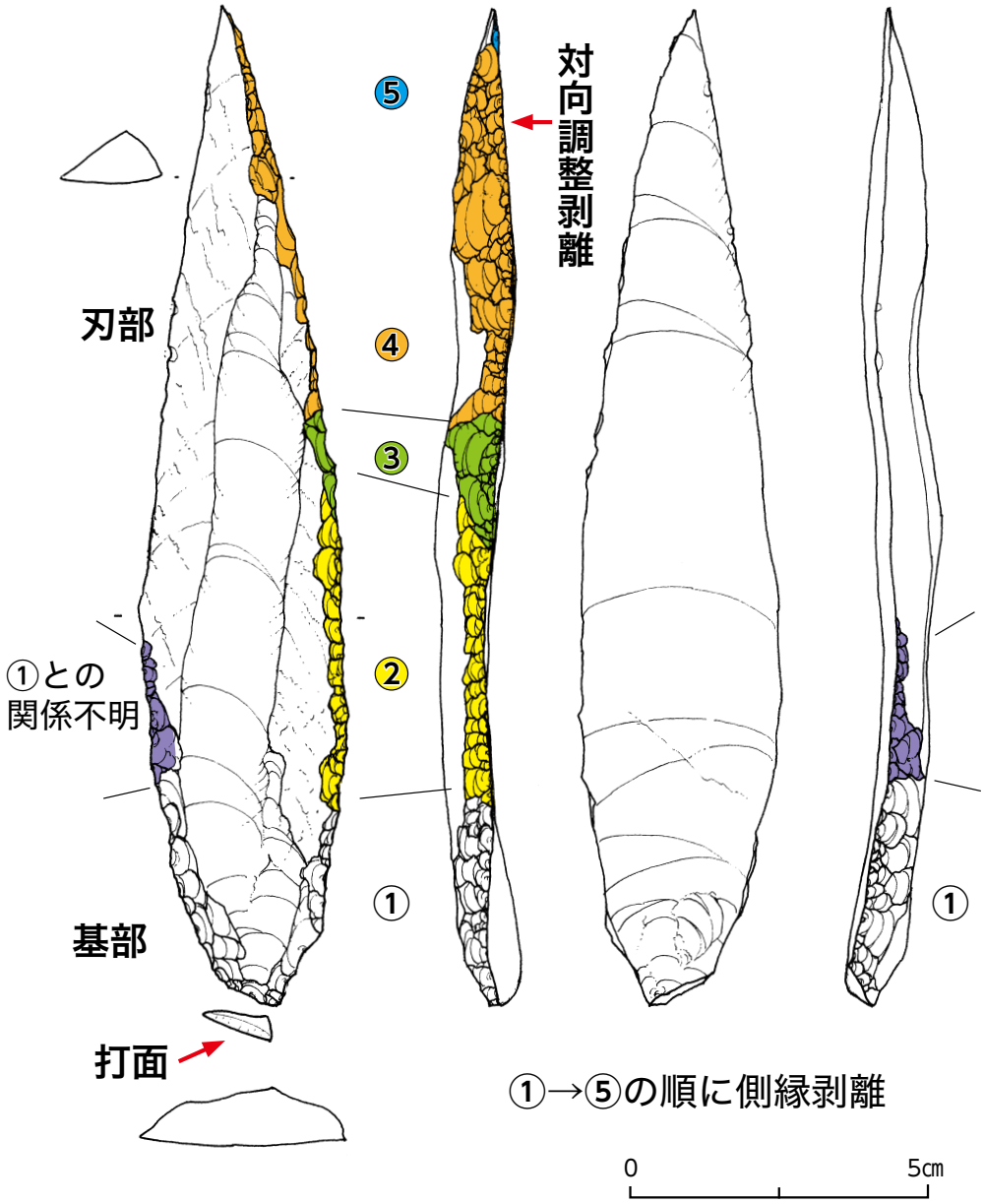
東海道遺跡は、印西市の南西部、印西市松崎東海道1314番２他に所在し、八千代市との市境を流れる神崎川と新川の合流点に近い標高約25mの台地上に立地しています。

発掘調査は、市道の整備に伴って令和元年８月から断続的に行われ、令和３年３月に3,572㎡の調査を終えました。調査の結果、奈良・平安時代の集落を中心に、縄文時代後期の小規模な集落や中世の土坑(地下式坑を含む)、古墳を転用した中近世の塚など、複数の時代にわたる人々の活動痕跡が認められました。

ナイフ形石器出土状況

今回展示したナイフ形石器は、「赤土(あかつち)」と呼ばれる関東ローム層(立川ロームⅦ層)から出土した旧石器時代(約３万３千年から３万年前)の石器です。石器製作の際に生じる剥片や砕片といった石屑を伴わずに単独で出土したことから、製品(完成品)として持ち込まれたものと考えられます。石材は硬質頁岩(けつがん)で、東北地方の日本海側に産出するものです。この石器の注目すべき点は、その大きさです。長さ16.36㎝、幅3.28㎝、厚さ１㎝、重さ56.98gあり、同時期のナイフ形石器としては、東北・北陸地方を除けば最大です。ちなみに、両地方を含めても、これを超える例は十指に満たないようです。

ナイフ形石器の用途は、木や骨、動物の皮を切ったり削ったりするほか、柄を取り付けて槍としても使っていたと考えられていますが、本例は超大型であることから実用品ではなかった可能性も考えられます。



ナイフ形石器実測図

水神作遺跡（第１・２・５次）―縄文時代中期の大規模集落―

水神作遺跡は、成田市の北東部、成田市所字鉢山849番地１他に所在し、利根川に注ぐ大須賀川の東岸、標高約39mの台地上に立地しています。

第１・２次発掘調査は、市道の拡幅に伴って698㎡を対象に平成28年４月から平成29年３月まで断続的に実施しました。調査の結果、縄文時代中期（約６千年前）の集落跡を中心に、中世の溝等が検出されました。道路の拡幅部分という限られた範囲ではありましたが、その後に行われた北東側近接地での調査（第４～６次）成果と照合すると、第１・２次調査区が集落の西限であることがわかりました。なお、平成31（令和元）年に行われた第５次調査では、長軸約12mの大型竪穴住居跡が検出されました。

遺跡の中心となる縄文時代中期の遺構は、竪穴住居跡６軒、土坑70基などです。それぞれの遺構が複雑に重複している上に畑の耕作による撹乱が著しく、遺存状態は良くありませんでした。

出土した遺物には、深鉢や浅鉢といった一般的にみられる土器のほか、土器の製作台と考えられている「台形土器」もあります。また、石鏃（せきぞく）や石斧（せきふ）、磨石（すりいし）、敲石（たたきいし）、石皿（いしざら）といった石器、「土器片錘（どきへんすい）」と呼ばれる土器片を再利用して作った漁網錘が出土しました。

土器の主体となる時期は、中期後半の加曽利（かそり）Ｅ１式～Ｅ２式土器ですが、甲信地方の曽利（そり）式土器や東北地方の大木（だいぎ）式土器、武蔵野地域の連弧文（れんこもん）土器、そして、それら他地域の影響を受けたものもあります。また、加曽利Ｅ式土器よりも古い勝坂（かつさか）式土器には、人か蛙か区別がつかない装飾（抽象文（ちゅうしょうもん））が施されたものがあります。縄文人のどのような思いが込められているのでしょうか。

加曽利Ｅ式土器と連弧文土器（左上）

抽象文土器（勝坂式）

展開写真

株木第２号墳 ―印旛郡内の希少な中期古墳―

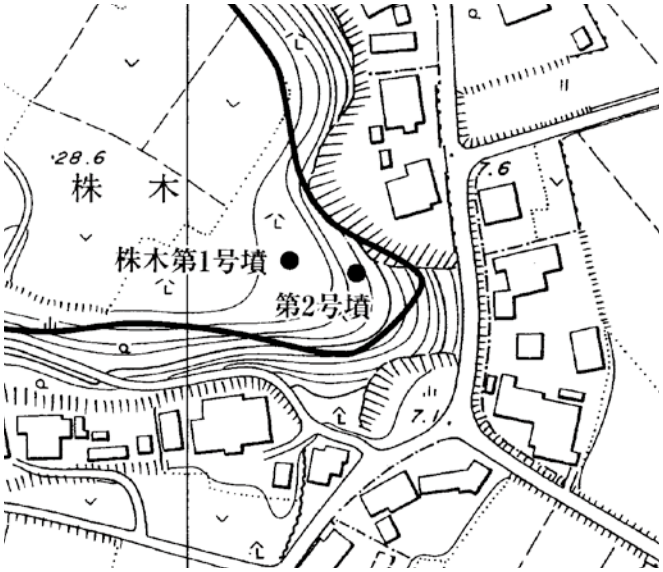
株木第２号墳は印西市萩原字株木1614、1615に所在し、北印旛沼西岸の標高28mの台地上に立地しています。発掘調査は急傾斜地崩壊対策事業に伴い平成28年12月から平成29年９月まで断続的に行われました。第１号墳と共に２基の単独墳(円墳)で構成され、第１号墳は墳丘径約10.2mの小型円墳ですが、発掘した第２号墳は墳丘径18.8mとやや大型です。このうち第２号墳の主体部(埋葬施設)は３基検出されましたが、いずれも木棺直葬(もっかんじきそう)です。３基のうち第１主体部が墳丘中央に位置しているため、主体的被葬者と推定されます。この第１主体部からは管玉(くだたま)や勾玉(まがたま)など合計22点の玉類が出土し、古墳時代中期に導入される滑石製臼玉(かっせきうすだま)と前期末から中期初頭に類例をもつ琥珀(こはく)製小玉がみられることから、本古墳の築造は古墳時代中期前葉(５世紀前葉)と考えられます。

また、第１主体部の棺床(かんしょう)の直上からは鉄剣１振が、第２主体部からは直刀(ちょくとう)１振が、鉄鏃(てつぞく)は第２主体部から３点、第３主体部から９点出土しています。これらの剣や直刀はいずれも出土した位置から棺の上に置かれていたものとみられ、埋葬の状況をうかがい知ることができます。

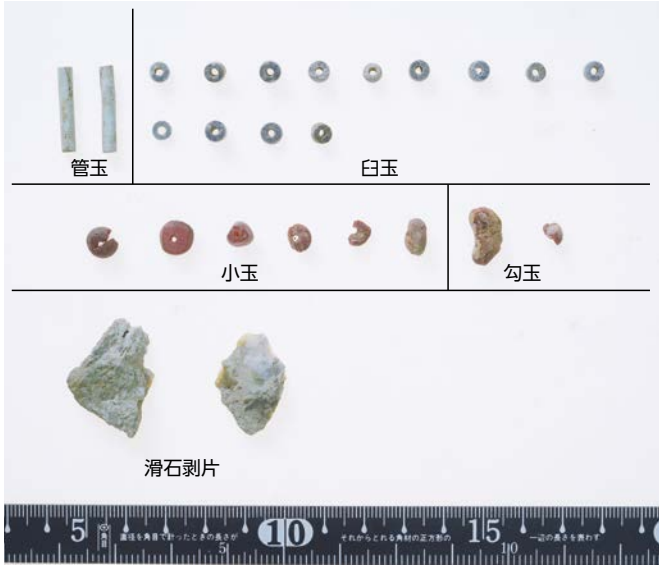
株木第２号墳は印旛郡域では数少ない古墳時代中期前葉に遡(さかのぼ)る古墳であり、当地域の古墳定着期の重要な資料といえます。

調査区遠景

第２主体部直刀出土状況



株木第２号墳と周辺地形（1/2,500）



第１主体部出土石製品

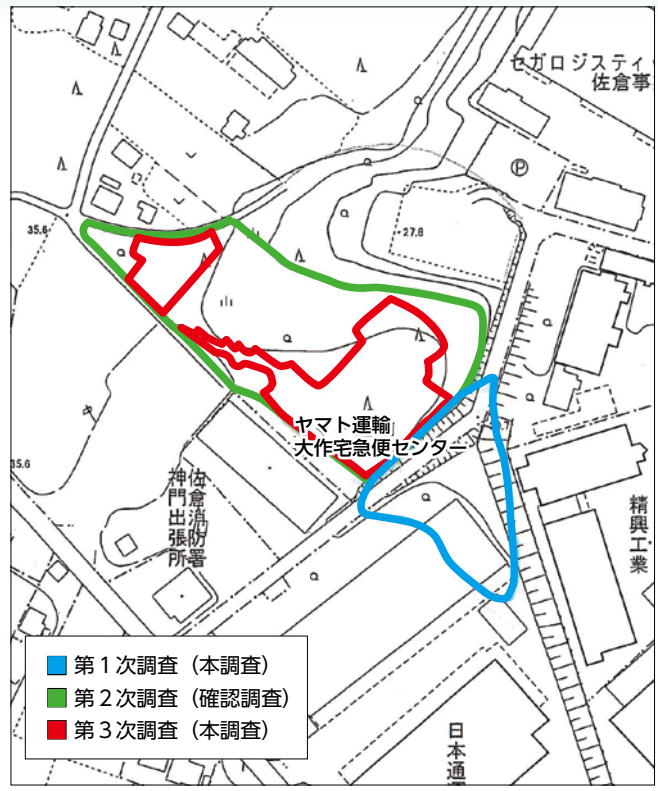
向山谷津遺跡（第３次）―鹿島川中流域に位置する奈良・平安時代の一集落―

向山谷津遺跡は、佐倉市南東部の和田地区、佐倉市神門字向山谷津644番地1に所在し、印旛沼に注ぐ高崎川と鹿島川の支流によって開析された標高約34ｍの台地上に立地しています。佐倉第三工業団地の造成に伴って行われた昭和58年の第１次調査以来、このたび資材置場建設に伴う第２次・第３次調査が実施されました。

調査の結果、縄文・古墳・奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されました。とくに奈良・平安時代の竪穴住居跡は14軒と多く、第１次調査で検出された１軒を合算すると合計15軒となります。住居跡の分布状況を見ると、今回の調査区が奈良・平安時代における集落の中心部であると考えられます。

本遺跡では様々な器種の土師器（はじき）・須恵器（すえき）が出土しましたが、とりわけ注目すべき遺物として漆入り須恵器坏（つき）があります。漆に関連する遺物は佐倉市では初の発見となります。坏内面の８割が漆で満たされていることから、漆の採取、あるいは漆を塗布する際に用いられた器であると考えられます。なお、赤外線やX線で分析した結果、内部に漆の乾燥を防ぐ紙などの付着物がないことが判明しています。

出土した須恵器は在地産のものだけでなく、湖西（こさい）産や猿投（さなげ）産といった遠く東海地方の製品もあります。こうした遠隔地の須恵器は、この集落が営まれていた時期にヒト・モノの交流が盛んであったことを物語っています。このほか、墨書土器・刻書土器が合計6点出土しました。土師器坏の外面に記された「荒刀」の文字列は、当時の人名を表していると考えられます。



向山谷津遺跡地形図（1/2,500）

墨書土器「荒刀」（赤外線写真）

刻書土器「十」

11号住居漆入り須恵器坏出土状況

漆入り須恵器坏

おわりに

今回は印旛郡内のそれぞれ異なる時代の４遺跡の出土品に焦点を当てて取り上げました。かつて便利な道具として人々に用いられ、あるいは葬送のため特別に作られた遺物の数々は、現代に生きる私たちが当時の文化や生活をうかがい知ることのできる貴重な資料です。

旧石器時代の人々は、様々な石器製作技術を発達させました。石器は狩りに用いられるだけでなく、木や骨を削ったり、動物の皮を剥いだり、日常の様々な場面で使われる道具でした。今回東海道遺跡で発見されたナイフ形石器は、遠隔地の石材を使って作られたものであり、当時広範囲にヒトやモノが流動していたことを示しています。水神作遺跡の縄文土器に施された一見不可思議な文様は、縄文人のどのような思いが込められていたのでしょうか。また、一般的に古墳時代前期の副葬品には鏡や玉類などの祭祀的性格が強いものが多く見られますが、中期になると鉄製の甲冑や刀剣などの武器が多く副葬される傾向にあります。今回取り上げた株木第２号墳からも多くの武器が出土しており、古墳の時期を推定する貴重な手がかりとなりました。そして、向山谷津遺跡で出土した漆入りの須恵器坏や墨書土器に見られる漆や文字の利用は、遥か昔の文化と今の文化との繋がりを私たちに伝えています。

印旛郡内には数多くの遺跡がありますが、当センターでは今後も継続的に様々な時代の遺跡を調査してまいります。それらの成果につきましてはホームページ等で随時お知らせしていますので、ぜひご覧いただければと思います。

◇**交通機関**◇東関東自動車道佐倉ICから県道65号線経由で10分／JR佐倉駅からバス約7分、ちばグリーンバス「石川入口」下車

公益財団法人
印旛郡市文化財センター
千葉県佐倉市春路1-1-4 TEL 043-484-0126 http://www.inba.or.jp/

QRコードを読み込んで
スマートフォンサイトへ
今すぐアクセス！